

中国大陸における北方と南方の音声特徴の考察

劉麗

1. 南北の文化区分について

従来、行政管理においては、中国は揚子江を境に、それ以南は南方地域とし、それ以北は北方地域とされている。しかし、文化、言語の特徴から見ると、南北をこのように単純に分けることはできないことが、この度の現地調査で分った。文化の形成は、気候に大いにかかわると言われる通り、揚子江を挟んだ中間地域は、気候上も南北の特徴が入れかわり、その文化、言語も、南北のどちらともつかないいわゆる中間地域の独特な姿を形成している。

簡単な例だが、「爬龍船」(舟漕ぎの競争)は、元来、南方の水郷に特有の行事である。端午の節句に、川にちまきをなげ、太鼓をたたきながら舟漕ぎを競って、愛国詩人とたたえてきた屈原を祭る行事である。似かよった行事は、杭州にも行われているようだが、蘇州あたりへ行くと、類似した行事は行われていないという。

果物ほど、気候に影響されるものはない。芭蕉は、南方の多湿温暖の地方になじむ果物だが、杭州にも芭蕉の木があるのにおどろいた。よく聞いてみると、木はあるが、実はならないようだ。

このように、江南あたりは、気候的にも、習慣的にも、南北のどちらともつかず、独自の系統をなしているのである。

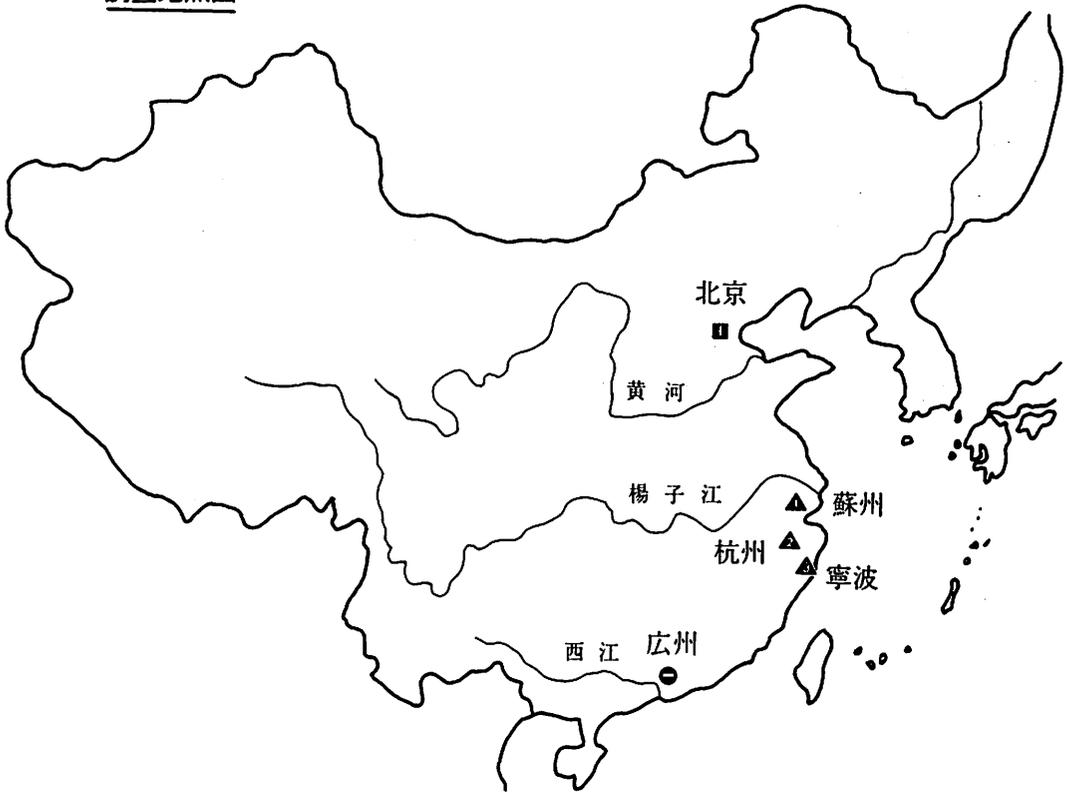
2. 中間地域における音声特徴

この度、江蘇省蘇州市の近郊にある常青郷、浙江省杭州市の近郊にある長命郷と、同浙江省寧波市の近郊にある鄞県の三地点で言語調査を行った。中国の方言分布から言えば、これらの地点はいずれも呉方言に属する。(調査地点図参照) 中間地域の呉方言には、北方語系の北京話にも、南方方言の広州話にもない音声特徴が観察された。

(1) 両唇摩擦音 [Φ]

呉方言において、「花」を、[Φo:, x^Φo:] という発音が観察された。この両唇摩擦音の [Φ] は、北京話にも、広州話にも観察されない。これに対応する音として、北京話では [x] を用い、広州話では [f] を用いる傾向がある。

調査地点図



	(北京)	(蘇州)	(杭州)	(寧波)	(廣州)
<花>	xuaŋ	xɔ:	Φɔ:, x ^Φ ɔ	xɔ:	fa:
<浮ぶ>	p ^h iau(漂)	t ^h ən	wu:(浮)	Φu(浮)	fau(浮)

(2) グロツタル・ストップ [ʔ]

呉方言において、グロツタル・ストップが観察された。例えば、「暗い」は、北京話では [hei] と発音するが、蘇州話では [ʔe:] と発音され、杭州話では [xɛʔ]、そして寧波話では [ʔə:] と発音される。このように、呉音系において、グロツタル・ストップが、語頭か語尾に来る音声現象が観察されたが、北京話ではこれがない。呉方言の語尾にくるグロツタル・ストップに対応して、広州話では入声の [-p] [-t] [-k] が用いられる傾向が強い。

	(北京)	(蘇州)	(杭州)	(寧波)	(広州)
<暗い>	hei(黒)	ʔe:	xɛ²	ʔə:	xak
<雪>	ʃicee:	se:²	ʃie²	so²	ʃyt
<葉>	je:r	je:ts²i	je²	je:p²e	jip
<大麦>	t²a:mai	t²ama²	t²ɔuma²	t²aima²	t²aimak
<刺す>	tʂ²a:(扎)	tsʰɔ²(戳)	tsʰɔ²(戳)	tsʰɔ²(戳)	k²at(拮)

さらに、呉方言では、[ʔɔ²]、[ʔa²]、[ʔwa²] のように、グロツタル・ストップが語頭、語尾に来る。北京話にも、広州話にもこのような音声現象は考察されない。

	(北京)	(蘇州)	(杭州)	(寧波)	(広州)
<押す>	an(按)	ʔɔ²	ʔa²	tʰai	ɟat(压)
<掘る>	wa:(挖)	tsʰɔ²	ʔwa²	ʔwa	wat

3. 南方方言としての特徴

呉方言は、中間地域にあたるがゆえに、それ独自の特徴をなしているとは言え、いから南方方言の特徴をもそなえている。

(1) 子音が独立した音節となる

広州話では、[ɱ] (~しない)、[ŋk²ɔ] (五つ) などのような、子音 [m] や [ŋ] が独立した音節をなす音声現象が観察される。しかし、北京話にはない。呉方言では、[ɱ]、[ŋ] に加えて、[ŋ] も用いられる。

	(北京)	(蘇州)	(杭州)	(寧波)	(広州)
<五つ>	wuk²ə(五个)	ŋ:k²ə	wuts²a(五只)	ŋ:kə	ŋ:k²ɔ、(五個) ; ɱ:tsek (五隻)
<魚>	jy:	ŋ:	ŋ:	ŋ:	jy:
<あなた>	ni:(你)	ne:	ŋ:	nau	nei
<里芋>	jy:tʰɔu(芋头)	jʷuna:	ŋ:na	ŋ:na:	wutʰau
<ない>	mei(没)	ɱ:p²a²	ŋ:t²e²	ma²	mɔu(冇)
<母>	ma:(妈)	ŋa:	ɱ:ma	ɱma:am	ama:

(2) [k] 子音の円唇化

広州話において、子音 [k] を円唇化した [k̠] 子音が観察される。例えば、[k̠²ɔŋ] (光)、[k̠²hɔn] (スカート) などがある。この現象は呉方言にもある。しかし、北京話においては、それぞれ [k²uaŋ]、[tʃ²yn] のように発音する。

	(北京)	(蘇州)	(杭州)	(寧波)	(広州)
<骨>	k²u.h²ou(骨头)	k²ut²ei	k²ət²ə:	k̠²at²ai	k̠²ʌt(骨)
<滑っこい>	xua:liu(滑溜)	wa:(滑)	k̠²əŋ	wa²(滑)	wat(滑)
<切れる>	k²uai(快)	k̠²a(快)	k̠²a(快)	k̠²a(快)	fai(快); lei(利)
<広い>	k²uan(寛)	k̠²akk²ə	k²ɔk	k̠²a()	fut(濶)
<寝ている>	ʃueit²ə(睡着)	k²uŋts²a	k̠²əntzek	k²unk²a	fentʃ²ək(躺着)

(3) 入声音 [-p] [-t] [-k]

広州話は、[-p] [-t] [-k] の入声音が音節末にくることが有名で、これは南方方言の一特徴とされている。北方の北京話にはこの入声音が観察されないが、中間地域の呉方言には、この入声音が数多く観察される。例えば、北京話で [tʃ²jau] (角) と発音する音節は、広州話も、呉方言も [k²ɔk] となる。また、北京話で [ly:] (緑) と発音する音節は、広州話も、呉方言も [lɔk] と発音する。また、広州話では [sap ts²ek] (十)、[tʃ²hʌts²ek] (七つ) と発音するのに対して、呉方言ではそれぞれ [setts²ʌ]、[tʃ²itts²ʌ] などと発音する。ほかにも入声がかかる語例が呉方言では数多く観察された。

	(北京)	(蘇州)	(杭州)	(寧波)	(広州)
<七つ>	tʃ²ik²ə(七个)	tʃ²ik²ə	tʃ²itts²ʌ	tʃ²ik²ə	tʃ²hʌts²ek(七隻)
<角>	tʃ²jau	k²ɔk	k²ɔk	k²ɔk	k²ɔk
<緑>	ly:	lɔk	lɔk	lɔ:	lɔk
<濡れる>	ʃit²ə(湿的)	sə:(湿)	sek(湿)	ʃek(湿)	sap(湿)
<一つ>	ji:k²ə(一个)	ikk²ə	itts²ʌ(一只)	jik²ə(一个)	jʌts²ek(一隻)

(4) 鼻音 [ŋ] が語頭に立つ

広州話と呉方言では語頭に立つ鼻音の [ŋ] がある。広州話の [ŋan] (目) に対応

して、呉方言では [ŋe:] と発音し、広州話の [ŋa:] (齒) に対応して、呉方言では [ŋa:] か [ŋo] で発音する。ただし、北京話では、このような [ŋ] がなく、それぞれ [jen]、[ja:] と発音する。ほかに、広州話では [ŋo:] (私)、[ŋap] (鴨)、[ŋam] (ただしい) など、呉方言では、[ŋu:] (岸)、[ŋa] (月) など、語頭にたつ鼻音 [ŋ] が数多く観察されたが、北京話にはこれがない。

	(北京)	(蘇州)	(杭州)	(寧波)	(広州)
<目>	jiɛŋ ² iŋ(眼睛)	ŋe:t ² iŋ	ŋe:t ² iŋ	ŋe:t ² iŋ	ŋant ² ɛŋ
<齒>	ja:(牙)	ŋa:ts ² i(牙齒)	ŋa:ts ² i(牙齒)	ŋo:ts ² i(牙齒)	ŋa:(牙)
<噛む>	jau(咬)	ŋə:	ŋɔ:	ŋo:	ŋau
<海岸>	haian(海岸)	xɛ:ŋu:(海岸)	xɛ:p ² i(海辺)	heŋe(海岸)	xɔiŋɔn(海岸)
<月>	jœ	ŋa	jɔ:	jə	jyt

以上の(1)~(4)の特徴を見て分るように、呉方言は、中間地域にありながら、南方方言の特徴も観察される。

4. 南北に見る音の対応関係

中国の南方と北方では、対応する音の特徴がある。それゆえに、南方出身の人が北方語(普通話)を使うのにたいへん骨が折れ、北方出身の人が南方に来ると、まるで外国へ来たと言ってよいほどである。南北語の音対立による誤解の一例をあげると、次のようである。

広州話においては、「二」を [jit]^{<1>} と発音するが、北京語では、「一」のことを [jiŋ]^{<2>} と発音する。そこで、道を聞く北方の人に、広州の人は熱心に「二番のバスに乗りなさい」と教えてあげるつもりで、[jit lou t] と言うのを、北方の人は、それをどうしても「一番」にしか聞こえない。結局、一番のバスに乗ってたいへん苦勞をしたという。

また、南方方言においては、巻舌音がないので、普通話の「十」[ʃiV]^{<3>} と「四」[siŋ]^{<4>} の区別ができず、よく誤解を起こしたという例も枚挙にいとまがない。それゆえ、中国では「天不怕、地不怕、最怕南方人講普通話」(世の中にどんなにおそろしいことがあっても、南方の人が普通話を話すことほどおそろしいことはない)と言われるほど、南北語の発音の違いによる誤解が目立つのである。このような誤解を少しでも減らすため、本論では、中国の南北方言に観察される子音の対応、および中間地域にある呉方言の子音との対応を比較、分析してみる。

なお、母音の対応もかなり観察されるが、本論では除く。

(1) 卷舌音と非卷舌音との対応

卷舌音は北方語のみに観察される音声特徴で、吳方言や、広州話に観察されず、かわりに、齒茎音が硬口蓋音を用いる傾向がある。例えば、「種」のことを、北京話では [tʂ²ɔŋts²ə] と発音するのに対応して、吳方言では [tʃ²ɔŋts²i] と発音し、広州話では [tʃ²ɔŋts²i] と発音する。そのほか、北京話の子音 [tʂ] に対応して、南方方言では [ts²] を用いる語例が数多く観察された。

	(北京)	(蘇州)	(杭州)	(寧波)	(広州)
<種>	tʂ²ɔŋts²ə(种子)	tʃ²ɔŋts²i	tʃ²ɔŋts²i	tʃ²ɔŋts²i	tʃ²ɔŋts²i
<豚>	tʂ²u:(猪)	tʃ²u:	ts²i	ts²i	ts²y
<蛛>	tʂ²itʂ²u(蜘蛛)	ts²its²u	ts²əts²i	ts²its²i	ts²its²y

北京話の [tʂʰ] に対応して、吳方言と広州話では [tʃʰ] か [tsʰ] あるいは [s] で発音される傾向がある。例えば、北京話の [tʂʰuan] (舟) を、吳方言では [sə:] か [sʷu:] と発音し、広州話では [syn] と発音する。北京話の [tʂʰuei] (吹く) の子音に対応して、吳方言も、広州話も [tʃʰ] を用いる。

	(北京)	(蘇州)	(杭州)	(寧波)	(広州)
<舟>	tʂʰuan(船)	sə:	sə:	sʷu:	syn
<吹く>	tʂʰuei(吹)	tsʰu:	tsʰe:	tsʰi	tsʰœi
<重い>	tʂʰən(沉)	sɔŋ(重)	ts²ɔŋ(重)	tʃ²ɔŋ(重)	tʃʰɔŋ(重)
<潮>	tʂʰauʂuei(潮水)	sə:sui	ts²ausei	tʃ²ɔ:sī	tʃʰiusœi

また、北京話の子音 [ʂ] に対応して、吳方言と広州話では [s] か [ʃ] を用いる。例えば北京話の [ʂan] (山) [ʂuei] (水) [ʂi] (石) [ʂa] (砂) などの子音に対応して、吳方言も広州話も [s] を用いる。

	(北京)	(蘇州)	(杭州)	(寧波)	(広州)
<山>	ʂan	se:	sɛ:	se:	san
<水>	ʂuei	su	sī:	sī	sœi

<石>	ʃit ^h ɔ (石头)	sat ² ai	sət ² ə:	sət ² ai	sekt ^h au
<砂>	ʃats ² ə(砂子)	sɔ:(砂)	sɔ:ni:(砂泥)	sɔni:(砂泥)	sa(砂)
<十>	ʃik ² ə(十个)	sək ² ə(十个)	setts ² ʌ(十只)	sʌk ² ə(十个)	sapts ² ek(十隻)
<数える>	ʃu:(数)	sɔu ²	səu	su:	sou
<虱>	ʃits ² a(虱子)	sa ² (虱)	səts ² i(虱子)	sa ² (虱)	sat(虱)

そのほか、北京話の子音 [ʃ] に対応して、吳方言や広州話では [s] か [ʃ] を用いる音節も観察された。例えば、北京話の [ʃu:] (木) の子音に対応して、吳方言では [s] を用いるが、広州話では [ʃ] を用いる。また、北京話の [ʃou] (手) の子音に対応して、吳方言では [s] と [ʃ] の両方が観察されるが、広州話では [s] だけ現れる。

	(北京)	(蘇州)	(杭州)	(寧波)	(広州)
<木>	ʃu:(樹)	su:	sī	sī	ʃy
<上>	ʃaŋ	səŋ	sʌŋ	ʃɔ:	ʃœŋ
<手>	ʃou	sui:	sə:	ʃu:	sau
<少い>	ʃau(少)	se:(少)	sa ² (少)	tʃ ^{hw} ə(缺)	sju:(少)
<濡れる>	ʃit ² ə(湿的)	sə:(湿)	sek(湿)	ʃek(湿)	sap(湿)
<舌>	ʃwat ^h ou(舌头)	sət ² ei(舌头)	set ² ə:(舌头)	ʃiet ² ai	sit(舌) ; lei(脷)
<蛇>	ʃə:	sɔ:	sɔ:	dʒɔ:	se:

北京話の子音 [ʒ] の一部の音節に対応して、吳方言では [ɲ] を、広州話では [j] を用いる傾向がある。

	(北京)	(蘇州)	(杭州)	(寧波)	(広州)
<人>	ʒ ən	ɲin	ɲin	ɲin	jən
<肉>	ʒ ou	ɲio:	ɲɔk	ɲio ²	jɔk
<暑い>	ʒ ə:	ɲe:	ɲie:	ɲe:	jit

このように、北京話における巻舌子音のいずれも、吳方言、広州話においても非巻舌音で表われる。巻舌音は中国北方語の一大特徴とされており、これをもたない中間地域にあたる吳方言は、南方方言に近いと言える。

(2) [j] [ŋ] の対応

北京話の子音 [j] の一部の音節に対応して、吳方言も、広州話も [ŋ] を用いる傾向がある。

	(北京)	(蘇州)	(杭州)	(寧波)	(広州)
<目>	jentʃ ² ig(眼睛)	ŋetʃ ² ig	ŋetʃ ² ig	ŋetʃ ² ig	ŋants ² eg
<齒>	ja:(牙)	ŋats ² i(牙齒)	ŋats ² i(牙齒)	ŋots ² i(牙齒)	ja:(牙)
<嚙む>	jau(咬)	ŋə:	ŋɔ:	ŋɔ:	ŋau

(3) [w] [m] の対応

北京話の子音 [w] の一部の音節に対応して、吳方言と広州話では [m] を用いる傾向が観察された。中には北京話の [wən] (蚊) の [w] に対応して、吳方言も広州話も [m] を用いることと、北京話の [wei] (尾) の [w] に対応して、吳方言では [j]、[ɲ]、[m] を用い、広州話では [m] を用いるような語例も観察された。

	(北京)	(蘇州)	(杭州)	(寧波)	(広州)
<蚊>	wənts ² a(蚊子)	mənts ² i(蚊子)	ments ² i(蚊子)	wəŋtʃ ^h ɔŋ(蚊虫)	mən(蚊)
<嗅ぐ>	wən(聞)	mən(聞)	məŋ(聞)	ʃɔŋ	mən(聞)
<尾>	weip ² a(尾巴)	³ ji:pɔ: ²	mip ² ɔ	ɲip ² ɔ	meip ² a

(4) その他の子音の対応

北京話と吳方言や広州話との子音の対応は、ほかにもいくつか観察された。例えば、北京話の [xuɑŋ] (黄) の子音に対応して、吳方言も、広州話も [w] を用いる。また、北京話の [xu:t²ie] (蝶) の子音に対応して、蘇州話では同じく [x] を用いるが、杭州話、寧波話、広州話では [w] を用いる。そのほか、北京話の [xuaɪ] (花) の子音に対応して、蘇州話、寧波話では北京話と同じく [x] を用いるが、杭州話では [Φ] を用い、広州話では [f] を用いる。このように、北京話の [x] 子音に対応して、南方方言の広州話では [w] か [f] を用いるが、その中間地域にあたる吳方言では、北方語と同じく [x] を用いるか、あるいは南方方言に近い [x^Φ] を用いるか、さらに南北ともつかず、その中間で [Φ] を用いる。

	(北京)	(蘇州)	(杭州)	(寧波)	(広州)
<黄>	xuɑŋ(黄)	wəŋge:sə ² (黄顔色)	wəŋse ² (黄色)	wɔ:(黄)	wɔŋsik(黄色)

<蝶>	xut ² ie(蝴蝶)	xɔut ² e:	wut ² e:	wut ² ie	wut ² ip
<花>	xuar	xɔ:	Φɔ:	xɔ:	fa:
<灰>	xuei	x ^Φ e:	xei	x ^w ai	fui

5. 重要な南北の接触地帯

中国は広くて人口も多く、多民族国家である。少数民族はそれぞれ独自の言語を有するのはもとより、同じ漢民族の間でも、地方によってさまざまな方言を有している。生活環境、自然条件はその住民の生活習慣の形成に大いに影響し、住民たちのそれなりの文化、風俗、言語をも育てたであろう。今日、文化、情報の交流が世界的に頻繁になりつつある中で、国内での交流はもっとも基本となっている。各方言の特徴、およびそれらの対応関係を究明することは、国の文化、歴史の追跡にはもとより、毎日のコミュニケーションのためにも重大な意義を持っている。

本論は中国大陸における南北両語の音声特徴の比較研究の一つの試みにすぎない。この分析から、中国の文化は、簡単に南北に分けることができないことが分った。南北の間に中間地帯があり、そこには南北の特徴をも兼備しながら、中間地帯としての独自の特徴をも形成している。このことは、音声の面だけでなく、語彙体系、民俗風習などの面においてもあてはまる。要するに、この中間地帯は、中国の文化、歴史が重層をなしているところで、より奥深いものがある。これからもより多くの研究者の目を引くだろう。

注：〈1〉〈2〉：[ト]は広州話の第六声にあたるしるしで、[⌈]は普通話の第一声のしるし。

〈3〉〈4〉：[V]は普通話の第二声のしるし、[ト]はその第四声のしるし。

[付記]

本稿は指導教授中本正智先生からいろいろとご教示を賜り、心から御礼を申し上げます。

／参考文献／

牛島徳次・香坂順一・藤堂明保1968『中国文化叢書①言語』大修館書店

中本正智1976『琉球方言音韻の研究』法政大学出版局

服部四郎1984『音声学』岩波書店

王振昆・謝文庆・刘振铎1983『語言学基础』中央广播电视大学出版社

許宝华・汤珍珠1981『語音』上海教育出版社

閉克朝1982『入声』湖北人民出版社

华中師範学院中文系現代漢語教研室編1974『現代漢語音知識』湖北人民出版社

(Liu Li. 東京都立大学大学院学生)